

文化

音楽を言葉で表現する大切さ

吉田秀和賞受賞

京都大人文学研究所准教授
岡田暁生さん

「とにかく感無量です。クラシック音楽を聴き始めたきっかけは、まさに今年96歳の音楽評論家吉田秀和さんの影響だった。レコードに添えられていた解説に誘われた。「レコード解説は、ほどよい大きさ、字数で、聴いている間に読める。吉田さんの文章が奏でる音楽に聴き入った。暗唱できるほど読みました」

音楽がレコードから、

「とにかく感無量です。ある種の文学だった」と、その喪失を惜しむ。音楽を言語化、言葉で表現する大切さに取り組んだのが「音楽の聴き方」だった。「音楽は言葉を超える」という論理は、19世紀のロマン派が生み出したイデオロギーと指摘。その呪縛から離れ、語彙や語りの論理が増えるほど、人は豊かに音楽を聴けると説く。「聴いた音楽が言葉にされている

「たい！」は、自らの体験に発している。「3歳前からピアノの早期教育を受けて、6歳で『脱走』したもんで。非人間的な早期教育って何なのか、と」。膨大な教則本、指の器具、今日につながるピアノ教練の起源を、19世紀のピアノスト現象から解き明かした。

1960年京都市生まれ。大阪大助手を経て、神戸大助教時代(20

レコード解説は文学だった

優れた芸術評論に贈られる吉田秀和賞に、「音楽の聴き方」(中央公論新社)の著者、京都大人文学研究所准教授の岡田暁生さんが選ばれた。今年は芸術選奨文部科学大臣新人賞も受賞し、近代西洋音楽史研究を舞台に活躍がめざましい。

(河村亮)

CDを経て、データのダウンロードへ移りつつある。「単に音として聴くだけで、気にくわいなと簡単に消して何も残らない。解説文化がなくなった。レコードの解説は、読む人がそれを聴いていることを前提に

る楽しさ、面白さ。自分の感じることを言葉にするだけで、どれほど世界が広がるか」

01年、著書「オペラの運命」がサントリイ学芸賞を受賞した。

その傍ら、研究の枠にとられず、実践にも臨む。人文研で年に一度、岡田さんが解説するレクチャーコンサートは、毎回盛況だ。「音楽を聴く

「悪戦苦闘でした。自分の聴き方を文字にすることは自分を語ることに、人生を書くことに他ならない」

芸術選奨新人賞受賞作、音楽教育の歴史を探究した「ピアノストにな

で醸成される空気を大事に続けていきたい」と話す。

日本文化を討論

メディアアフォーラム

関西広域機構関西広報

センターなどは、11月11

日に大阪市天王寺区の大

阪国際交流センターで開

かれる「メディアアフォー

ラム2009」に、抽選

で50人を招待する。

食研究、伝統芸能、

画・アニメ研究、観光

分野において関西で活

する外国人4人をパネ

ストに迎え、「日本の

文化、再発見!!」のテ

マで討論。日本文化の

力をとらえ直す。

パネリストは、フー



「普段から音楽について話している人たちが、音楽を聴く耳を作ってくれる。1人でも欠けていたら、この本もできなかったでしょう」と語る岡田暁生さん(京都市左京区・京都大人文学研究所)